

不登校の現状と報道

2007

2007.8.26

札幌たのしい授業・研究サークル用レポート

仮説実験授業研究会・北海道・丸山秀一

[C]Maruyama Shuichi

【問題】

不登校者数の変遷は次のページのグラフの通り ,2001 年度をピークに減少に転じています。先日 , 文科省は学校基本調査の速報を発表し , 2006 年度の不登校者数が明らかになりました。では , 不登校者数は減少傾向のままだったでしょうか。

予想 小学校 () 中学校 ()

ア 減少傾向

イ 横ばいに

ウ 増加

2006 年度の不登校者数

学校基本調査の「調査結果の要旨」には、次のようにあります。

(太字と下線は原文のママ)

平成 18 年度間の長期欠席者 (30 日以上の欠席者) のうち、
「不登校」を理由とする児童生徒数は 12 万 7 千人 (4 千人増加)。

「不登校」を理由とする児童生徒数は、小学校 2 万 4 千人 (前年度間より 1 千人増加。対前年度比 4.9 パーセント増)、中学校 10 万 3 千人 (前年度間より 3 千人増加。対前年度比 3.4 パーセント増) の合計 12 万 7 千人 (前年度間より 4 千人増加。対前年度比 3.7 パーセント増)。

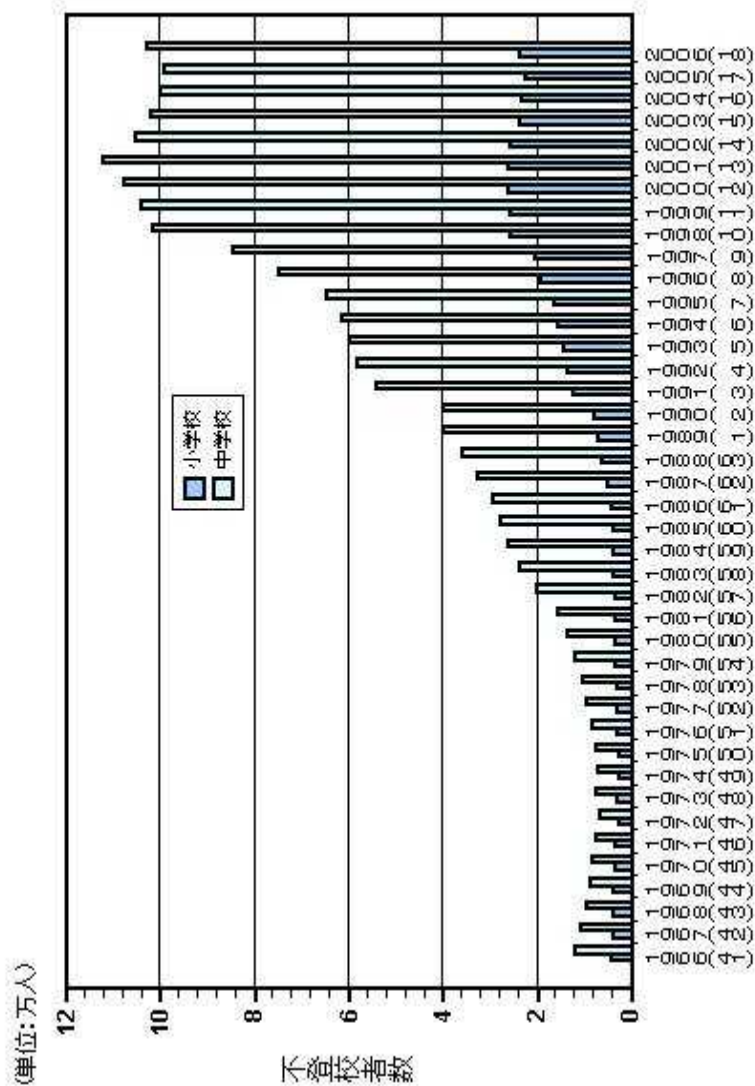
つまり「小中とも前年度よりも増加」ということです。昨年度の発表では「4 年連続減少」としていましたから、「5 年ぶりに上昇」ということになるかもしれません。

【問題】

では、この文科省発表をマスコミはどのように報道したのでしょうか。全国紙 (朝日、産経、日経、毎日、読売) のうちこの「不登校の現状」を第 1 面に取り上げた新聞はどれぐらいあったのでしょうか。

予想

- ア ほぼ全紙
- イ いくつかの新聞のみ
- ウ 全くない



大事件か

不登校について何面で記事にしたか。()内はトップ記事	
朝日	第1面(「東北大入札逃れ病院工事」)
産経	第1面(「米の協調路線背景に金総書記メッセージ」)
日経	社会面(「農林中金 日興プリンシパル買収へ」)
読売	第1面トップ
毎日	第1面(「被告早期保釈を 鹿児島事件無罪受け」)
道新	第1面トップ

(道新は北海道新聞でオマケ)

このように全国紙は4/5紙が第1面で報道し、そのうち1紙がトップ記事でした。「重大な事件」という扱いだっただけです。

【問題】

では、その記事のタイトルで一番多かった表現は次のうちどれだと思いますか。

予想

- ア 「不登校数過去最高」
- イ 「不登校5年ぶり増加」
- ウ 「不登校クラスに1人」
- エ 「減らない不登校」

「5年ぶり増加」

全国紙の記事タイトル（一部）	
朝日	中学不登校最多 2.86%
産経	不登校 5年ぶり増
日経	小中不登校 5年ぶり増
読売	不登校クラスに 1人
毎日	中学不登校 35人に 1人，5年ぶり増，過去最高

記事のタイトルでは「5年ぶり増加」としているのが3紙ありました。

【問題】

では生徒児童数での比率で見ても不登校者数と同じく「5年ぶりの増加」だったのでしょうか。これまで不登校者数は「4年連続減少」だったのですが，比率もそうだったのでしょうか。

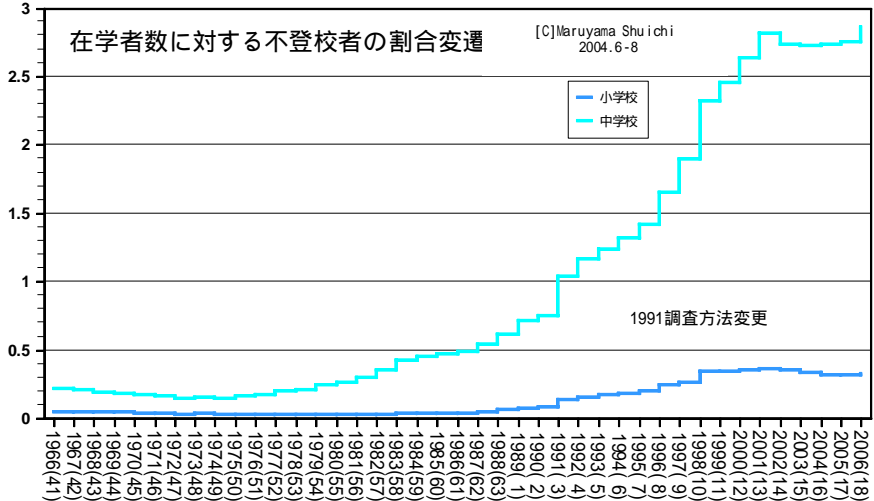
予想

- ア 減少傾向だった
- イ 増加傾向だった
- ウ なんともいえない

「5年ぶり」なのか

割合のグラフで見ると、不登校は「4年連続減少」とはいえないことが分かります。特に、「中学校」では2004年度から上昇傾向でした。ただ生徒児童数が減少しているため、比率で見ると、昨年度の不登校の伸びが際だっているのがよくわかります。

(単位:%)



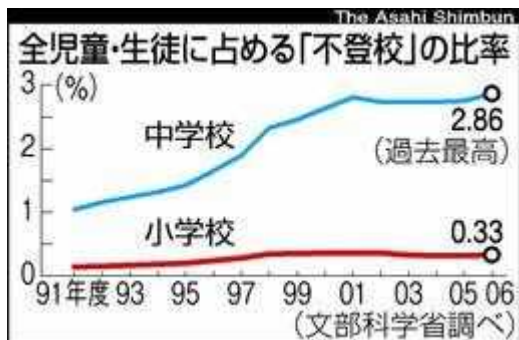
【問題】

ではこのような「比率では 5年ぶり増加 とはいえないこと」を指摘した記事を載せた全国紙はあったでしょうか。

予想

- ア いくつかあった
- イ 全くなかった
- ウ そのほか

報道姿勢



そのような記事を書いた全国紙はありませんでしたが、朝日新聞は図のようなグラフを載せて、記事にも「5年ぶり増加」という表現はありません

んでした。しかし昨年、全国紙各紙は次のような記事タイトルで文科省発表の「4年連続減少」を報道していました。

文科省発表に対する全国紙の記事タイトル 2006年	
朝日	大学・短大進学率、今春52.3%で過去最高に
産経	中学生の不登校率、4年ぶり悪化
日経	中学校の不登校学生比率、4年ぶり上昇
読売	不登校比率、中学は微増
毎日	不登校：全国の小中学校で12万2255人 4年連続減少

つまり産経と日経は昨年、「不登校率増加」と報道して、今年は「(不登校者数)5年ぶり増加」という報道をしているのです。

記事の内容は次の通りです。

比率について全国紙の記事内容 2006年 太字は筆者	
朝日	不登校は、小学校で2万3000人(同2.6%減)、中学校で10万人(同0.5%減)だった。小中学生の総数に占める割合としては1.13%と ほぼ横ばい だった。
毎日	中学生は、不登校の割合が「36人に1人」程度の2.75%と4年ぶりに上昇に転じたが、小中学生全体では、「89人に1人」程度の1.13%と 4年連続で低下 した。

比率について全国紙の記事内容 2006年 太字は筆者	
産経	生徒全体における出現率は1・13%で、89人に1人いる計算となった。数、率ともに4年連続の減少だが、 依然として高水準 にある。
日経	中学生の場合、全生徒に占める割合は2.75%で36人に1人が不登校の状態。4年ぶりにわずかながら上昇、小学生は横ばいだった。
読売	4年連続の減少だが、子どもの数も減っているため、不登校の子どもの割合は ほぼ前年度並みの1・13% (89人に1人)に上っている。

【問題】

では「5年ぶり増加の原因」についての「文科省のコメント」を各紙は、どのように報道しているでしょうか。

予想

- ア 「ゆとり教育」転換のため
- イ 「いじめ」の増加
- ウ 「学校や教師の問題」
- エ 「家庭の問題」
- オ そのほか

「増加の原因は いじめ 」

不登校増加の原因について文科省のコメント	
朝日	文科省児童生徒課は各地の教育委員会の報告から、「『いじめられるくらいなら、学校に行かなくていいよ』と考える保護者や専門家が増えた影響で、不登校が再び増えたのではないか」と分析している。
産経	(「文科省のコメント報道」は、なし)教育関係者からは、「いじめ問題の影響で『隠れ不登校児』が顕在化してきた」といじめとの関連性を指摘する声も出ている。
日経	文科省は「人間関係づくりが苦手な子どもが増えたことや、『行きたくなければ学校に行かなくていい』という親の増加など家庭での教育力低下が考えられる」と指摘している。
毎日	同省は「昨秋からいじめが問題化し『いじめられるくらいなら登校しなくてもいい』と考える保護者が増えたとみられる」と説明している。
読売	同省では、「いじめ自殺が相次ぎ、『いじめられるなら学校に行かなくていい』と考える保護者が増えたことも一因」とみている。

文科省のコメントを日経は「家庭教育力の低下」と受け取り、朝日、毎日、読売は「いじめ から不登校」と受け取ったようです。実は、朝日の記事タイトルには「いじめが背景に?」、産経の記事タイトルには「いじめ原因は 4688 人」、同じく読売には「いじめ回避が原因か」という文句もついていたのでした。

文科省の真意はどちらにあったのでしょうか。他社の記事も見てみましょう。

不登校増加の原因についての報道	
時事通信	文科省児童生徒課は「増加の要因は一律に説明できないが、人間関係づくりが苦手な子どもが増えたとの指摘もある」と分析。
共同通信	文科省は「いじめ問題などで、無理に学校に行かなくてもいいという考えが広まっているのかもしれない。家庭を中心に、登校を促す働き掛けを続けたい」としている。
不登校新聞	文科省は不登校の増加に対して「一概には言えないが、各県から『対応が十分でなかった』『家庭教育力の低下』『人間関係を不得手とする者の増加』などの声が寄せられた」との見解を示した。また、いじめ報道の影響については「『ムリに登校せず不登校を、という保護者が増えた』という指摘もあったが、学校から『いじめがあるなら行かなくてもいい』というメッセージを発してはいない。増加が、いじめ報道の影響によるものなのかはわからない」との回答にとどまった。
河北新報（社説）	増加について、「無理して学校に行かなくてもいい」といった考えが広まっているためだとの見方もあるが、理由が一体何なのか、調査では判然としない。
信濃毎日新聞（社説）	不登校が増えた理由に、これだという答えはない。一つの要因として、文科省は「いじめ問題などで、無理に学校に行かなくてもいいという考えが広まっているのかもしれない」と分析している。

NHK ニュース	文部科学省は、「増加が一過性のものかはしばらく様子を見る必要がある」と話しています。
TBS ニュース	文部科学省では、「憂慮すべき事態」とコメントしています。

「不登校新聞」の報道が一番詳しいのですが、これが文科省コメントの事実だとすると、全国紙などの報道とは異なっています。

【問題】

「いじめの増加で不登校も増えた」というのは事実と考えられるのでしょうか。これまでの年度別の「いじめ」と「不登校」のグラフを描いてみると、ふたつのグラフは似た傾向を示していると思いますか。

予想

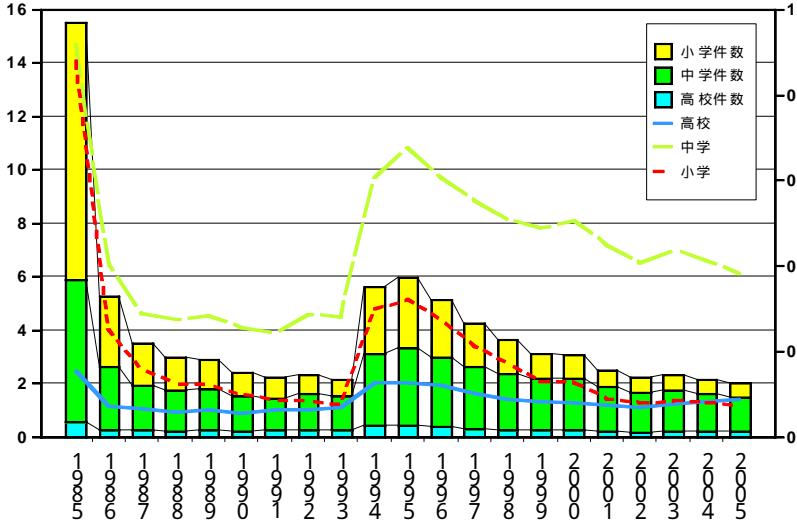
- ア 似ている
- イ 似ていない
- ウ なんともいえない

「いじめ」と「不登校」

(単位: 万件)

いじめ件数と割合

(単位: %)

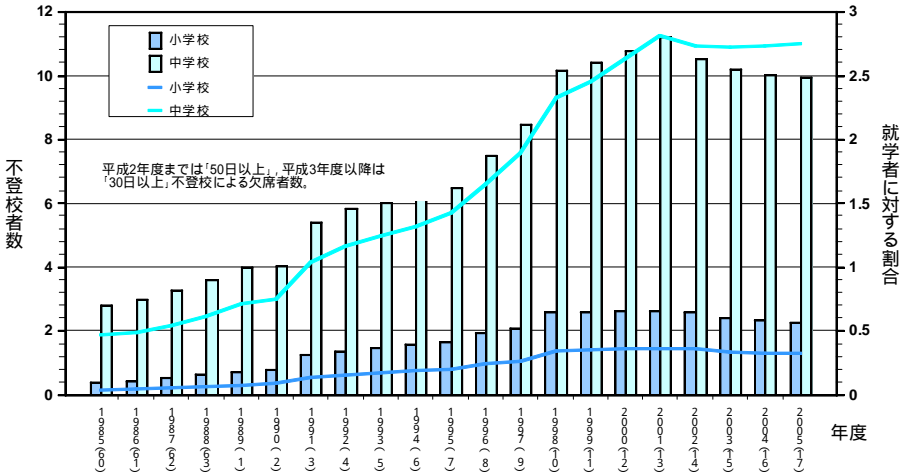


(単位: 万人)

不登校者数の変遷

2000.12-2005.8 [C]Maruyama Shuichi
データは「学校基本調査」(文科省)より

(単位: %)



「いじめ」調査の期間にあわせてグラフを描くと、ふたつのグラフはこのようになります。「いじめが多いと不登校が増える」という傾向はないのです。

【問題】

今回の調査から文科省は「不登校の原因」の調査で「いじめ」という選択肢を新たに設けました。

では、不登校者のうち「原因はいじめ」とされた者の割合はどれぐらいあったと思いますか。

予想

- ア ほとんどない
- イ 10%ぐらい
- ウ もっと多い

「不登校のきっかけ」

「不登校のきっかけ」の回答（複数回答）として一番多かったのが、「病気以外の本人に関わる問題」で 31.2%、以下、「いじめ以外の友人関係をめぐる問題」15.6%、「親子関係をめぐる問題」9.3%、「学業の不振」7.9%と続き・・・、「いじめ」を原因としたのは、3.2%でした（14 項目中 9 番目に多かった）。

【質問】

どうも「不登校が増えたのはいじめ増加が原因」とはいえないようです。では、不登校が数の上でも増加に転じた理由はなんなののでしょうか。あなたはどのように思いますか。

【問題】

ある人は「学力重視に転換した一連の 教育改革 が原因ではないか」と考えました。

ではその考えを指摘した全国紙はあったでしょうか。

予想

ア なかった

イ いくつかあった

ウ けっこうあった

学力が意欲か

次の記事は信濃毎日新聞の社説です。

・・・子どもの成長に学校が果たす役割は大きい。だからといって学校に戻れば問題が解決するわけではない。大事なものは、すべての子どもが学びの場を得られるようにすることだ。

まずは、学校がのびのびと過ごせる場所であるかを考えたい。

・・・教育を取り巻く環境も気になる。学力向上を掲げる“改革”が最優先では、不登校を増やす結果になるのではと心配になる。

全国紙では、毎日新聞が次のような記事で「学校改革の必要性」を取り上げました。

・・・通信制での高校卒業資格取得を支援する「サポート校」と呼ばれる私塾も乱立し、300校に達したとされる。

サポート校「東京国際学園高等部」(東京都渋谷区)は紺のジャケットに赤いネクタイ・リボンが制服。昼過ぎに現れる生徒もいるが、スタッフは「よく来たね」と温かく迎える。

・・・荒井裕司学園長は「励ましが次のエネルギーになる。出席が義務ではないので、普通の高校とは異なり自分のペースで通学できる」と説明する。不登校の現状について「医師や弁護士、教員などを親に持つ生徒に不登校が多く、親の圧力がつまずきの一因。教師も生徒に向き合う余裕がなく、不登校が増えるのは当然」と話す。

NPO法人「不登校情報センター」(葛飾区)の松田武己理事長は「通信制高校やサポート校は、対人関係を築くのが苦手な不登校の子どもに視線を合わせて、きめ細かい対応をしている。文科省や教委は、なぜ子どもが学校に通えなくなるのか考える

べきだ。学校を改革せず復学だけを求めても根本的な解決にはならない」と指摘した。

真剣に対策見直しを - - 「登校拒否を考える全国ネットワーク」の奥地圭子代表の話

各地の教育委員会は近年、不登校の数値削減にやっきになり、休みがちの子への登校圧力を強めていた。そうした政策の限界が5年ぶりの増加になったと思う。昨年頻発したいじめ自殺で「無理せず休む」ことの重要性が認識され始めたことも背景にある。ゆとり教育が見直され全国学力テストも始まり、子どものストレス度は高まっている。国は、学校復帰だけをゴールにせず、保健室やフリースクールとも無縁で孤立し苦しむ子の対策に真剣に取り組んでほしい。

また社説では次のように述べています。

今年度の学校基本調査速報で、不登校の小中学生が5年ぶりに増加した。これまで年ごとの漸減が続いていた。「対策が奏功している」と言ってきた文部科学省や教育委員会、学校はこの「反転」の原因をきちんと分析し対応を考えなければならない。

数は12万6764人で、全体の1・17%。前年度より4000人以上も増えた。一因には、昨年秋以来自殺さえ伴ういじめ事件が続発し、「過酷ないじめを避けるためには、学校を休むこともやむをえない」などの助言や考えが広まったからという見方がある。

そうだとするなら、その子はそれ以前にはいじめに耐え続けながら我慢の登校を続けていたことになる。数値上の「漸減」は上辺のもので、その陰で苦しむ子が少なからずいたというこ

とだ。

・・・しかし，増加の原因はそれだけではない。県教委などによると，不得手な人間関係づくり，学業不振，家庭の教育力の低下が傾向としてあるという。子供を学校に行かせる気が乏しい保護者もいる。

・・・「教育再生」論議は理念先行ではなく，こうした調査をしっかり活用し，現実に即して論じ合ってこそ説得力と効果を持つはずだ。

不登校の原因について社説	
中国新聞	<p>文部科学省は「いじめ問題などにより，無理に学校に行かなくてもいいという考えが広まっているのかもしれない」として，「家庭を中心に登校を促す働き掛けを続けたい」という。だが，学校に戻せばいいという考え方は，あまりにも短絡的すぎるのではないだろうか。</p> <p>・・・学校と距離を置かざるを得ない子どもの心を理解しないまま，いたずらに登校を強いても根本的な解決にはつながらない。</p> <p>・・・どの子にも不登校は起こりうる。大人も目先の数字ばかり気にするのでなく，子どもの声に耳を傾けることが必要だろう。</p>
河北新報	<p>不登校の子どもに登校を強要する一方の親や教師は今や少ないだろう。傷を深めるだけのケースもあるだろうから，その方向性は正しい。</p> <p>焦らずに子どもと接して心を解きほぐし，本当の理由が分かれば取り除けばいいし，ネットでの自宅学習やフリー</p>

	<p>スクールを検討してもいい。何より大切なのは、学校に行くよう圧力ばかりかけて、子どもを追い詰めないようにすることだ。</p>
北海道新聞	<p>不登校問題を、教師や親の責任として片付けることはできまい。不登校の原因も千差万別だ。こうした子どもの実態をしっかりとらえ、学校、家庭、教育委員会が協力して、きめ細かな対策を取ることが必要だ。</p> <p>・・・小中学校は、子どもの成長をはぐくむ貴重な場である。子どもの学ぶ権利を守るため、不登校対策は社会全体で取り組む課題だと考えたい。</p>
産経	<p>・・・不登校の子供に対して学校や教師がはれものに触るような態度で、家庭訪問もせず接触を絶つ傾向が根強い。「問題のある子供はこない方が楽」という学校の事なかれ主義さえうかがえる。これでは学校への復帰は進まない。</p> <p>旧文部省が平成4年に「無理に学校復帰を促すと逆効果の場合もある」と指摘したことも誤解され、消極的な対応に拍車をかけた。「学校に行きたくなければ行かなくていい」というのでは指導といえない。文科省の専門家会議はその後、こうした指導放棄を戒め、個別事情に応じた積極的な働きかけを求めている。</p> <p>・・・いじめ問題など公教育不信のなかで「学校に無理して行かなくてもいい」という風潮が広がるのが心配だ。</p>

産経新聞は記事本文でも

学校基本調査で不登校の小中学生が5年ぶりに増加に転じた。教育関係者からは、「いじめ問題の影響で“隠れ不登校児”が顕

在化してきた」といじめとの関連性を指摘する声も出ている。

・・・不登校児らを支援するNPO法人「トイボックス」(大阪市)の白井智子代表理事(34)は「昨秋以降のいじめ自殺の社会問題化で保護者が敏感になった。『無理に学校に行かせなくてもよい』との考えが広まっている」と指摘。別の側面として「個人情報保護法で、学校や行政側が家庭に干渉しない言い訳を作りやすくしている」状況を挙げている。

と「いじめ原因説」を取っています。

【研究問題】

「物心両面の繁栄により、平和と幸福を実現していく」という松下幸之助の願いのもと設立された民間シンクタンクである PHP 研究所は、この「不登校問題に対してどういう姿勢を取っていると思いますか。

予想

- ア 教育制度の改革が必要
- イ 学校以外の選択肢が必要
- ウ 親の教育力向上が必要
- エ そのほか

「不登校は自然」

PHP 総合研究所で教育研究部主任研究員の亀田徹さんは、PHP のサイトのコラムに次のように書いています（一部抜粋）。

不登校でない子どもの割合を100%にすることは理想ですが、いまの状況からするとその実現は難しいのではないかと考えられます。もちろん、学校教育が現状のままで良いと言うのはありません。子どもの実態に合わせて指導内容・方法を充実する必要がありますし、実際、多くの先生方は、子どもが不登校にならないように、あるいは不登校になった子どもがまた登校するようにさまざまな努力をされています。その努力は大切であり、登校した方がよい場合が多いのも事実です。しかし一方で、1千百万人いる小中学生の中には、通っている学校に合わない子ども、登校できなくなってしまう子どもがある程度いると考える方が自然なように思うのです。

不登校の問題点は何なのでしょう。例えば、学習が遅れる、社会性が育たない、進路が狭まる、世間体が悪い、等々と言われます。けれども、学校に通いさえすればそれだけで学力が向上し社会性が育つようになる、というわけでもありません。登校しようがしまいが、必要な学力や社会性を身につけることがその子どもにとっては大事なことです。学校は社会に出るための準備の場として重要な機能を果たしておりそのことを否定する必要はないのですが、学校だけが唯一の学びの場ではないでしょう。学校以外の場であっても社会に出るために必要な力を身につけることができるのだと考えれば、「不登校 = 悪いこと」「不登校 = あってはならないこと」という考えは一面的であるように思います。

不登校は、学校だけの問題ではなく、家庭や社会の問題でもあります。子どもや家庭、学校の状況はさまざまであり、不登校への対応も一律に決められるものではありません。どうしても登校できない場合もあるでしょうし、やはり登校した方がよい場合もあるでしょう。不登校の実態が多様であり、学校を休まざるを得ない場合もあるのであれば、学校以外の選択肢を認め、学校とは別の教育・学習システムを用意することが子どものためではないでしょうか。

【研究問題】

不登校の報道で沖縄の新聞だけは他県や全国の新聞とは異なることを問題としていました。それはなんだったと思いますか。

予想

- ア 不登校がとても多いこと
- イ 不登校の原因が非行であること
- ウ 「不登校は問題ではない」
- エ そのほか

沖縄の問題

沖縄の不登校で問題となっているのが 不登校の原因のうち「非行」が多い というものです。

二〇〇六年度に県内の小中学校で不登校だった児童・生徒は千六百二十五人（前年度千五百六十四人）で、二年連続で増えた。中学生の不登校の原因は複数回答で「遊び・非行」が38・5%（全国9・8%）を占め、全国の約四倍に上った。

・・・ 沖縄大学の加藤彰彦教授は「遊び・非行」の不登校が多いことについて「親や家庭だけの責任ではない。社会全体に将来への展望がなく、学校で学ぶことに魅力が持てないことが背景にある。子どもは自分たちが主人公となる場を求めている」と指摘。「家庭・学校も含めた地域が子どもにどれだけ期待し、役割を持たせられるかが鍵となるだろう」と強調した。

琉球新報

全国では「不安など情緒的混乱」が最も多いのに対し、沖縄は深夜はいかいなどの「遊び・非行」の割合が最も高いのが特徴。不登校の支援に取り組む専門家は、「社会の理解は広がっているのに、人数が増えているのはショックだ」と危機感を募らせている。

・・・ 不登校の問題に取り組む日本青少年育成協会沖縄支部長の上江田紫寿江さんは、情緒的な不登校への支援が進む一方で、「非行」への理解と対策が遅れていることに警鐘を鳴らす。「生徒指導の在り方や取り組みをあらためて考えなければならない。なぜ非行に走り、不登校になるのか。子どもと向き合って軌道

修正を促す必要がある」と強調した。

沖縄タイムス

【復習問題】

では、文科省はどんなことを「不登校解決の目標」としているのでしょうか。

予想

- ア とにかく学校に来ること
- イ 学校に限らず何かの施設などでも出席すること
- ウ 社会的に自立すること
- エ そのほか

不登校解決の目標

文科省の不登校に対する考え方は、一貫しています。不登校の解決の目標は「児童生徒が将来的に精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるよう、その社会的自立に向けて支援することである。その意味においても、学校に登校するという結果のみを最終目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的にとらえ、社会的に自立することを目指すことが必要である」ということで、変化はしていません。

【復習問題】

では、文科省は「学校の取り組み」としては、どうすればよいとしていると思いますか。

予想

- ア 魅力ある学校づくり
- イ 教員の資質向上
- ウ 特色ある学校づくり
- エ 教育課程などの弾力化
- オ そのほか

「心の居場所」

文科省が設置した「不登校問題に関する調査研究協力者会議」は、2003年に最終報告を出しています。そこには「学校の取り組み」として次のように書かれています。

学校は、児童生徒が不登校とならない、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを主体的に目指すことが重要である。

具体的には児童生徒にとって、自己が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる「心の居場所」として、さらに、教師や友人との心の結び付きや信頼感の中で主体的な学びを進め、共同の活動を通して社会性を身に付ける「絆づくりの場」として、十分に機能する魅力ある学校づくりを目指すことが求められる。すべての児童生徒にとって、学校を安心感・充実感の得られるいきいきとした活動の場とし、不登校の傾向が見え始めた児童生徒に対しても、不登校状態になることを抑止できる学校であることを目指すことが重要である。

つまり不登校を減らすために、「子どもたちに 行きたい と思ってもらえるような魅力的な学校にきなさい」としているのです。しかも、それは「学校が主体的に行うことが大切だ」としているのです。

この解決策は「あたりまえ」のことものようにも思えます。学校がたのしいものになれば、不登校問題はなくなるでしょう。しかし、今の学校はこの方向に向かっているのでしょうか。この報告は、次の文章で結ばれています。

不登校対策については、画一的な不登校像を安易に描いて論ずるのではなく、不登校児童生徒の将来の社会的自立を目指し、

一人一人の状況を踏まえて、その「最善の利益」が何であるのかという視点に立ち、真剣に考えなければならない課題である。国はもとより、家庭、地域、学校関係者など教育に携わる者全てが、そうした姿勢を常に保ちつつ、不断の取組を進めていくことを願って止まない。

もし「具体的な手だて」が何もないのであれば、こうしたことは「絵に描いた餅」にすぎません。しかし、「たのしい授業」というたしかな手だてがあるのです。変わるべきは、不登校の子どもの方ではなく、学校なのです。そして、もし変わることができないのであれば、早晩、学校以外の選択肢に変えられてしまうことでしょう。

ボクも不登校だから?!

予想通り、不登校は増加し続けています。いつものように新聞各紙の報道が気になって、コンビニをまわって新聞を買い集めました。

最近異常に緊張することばかりで、集中力がイマイチです。緊張する一番の理由は、夏休み明けに「いやホント、休み中は、ずっとセンセの授業受けたかったよ」と言ってくれる生徒さんたちがいるからかな。その期待に応えるべく必死になっているボクがいます。まるで「先生のためにがんばる優等生」みたいなんだけど、「それだけがたのしみ」というのもあるので、「1 試合完全燃焼」ならぬ「1 時間完全燃焼」と、まるで「アストロ球団」であります。しかし胃薬が必要。笑。

今日は生徒さんに、「センセは、職員室では異端でしょ」と言われてしまいました。いや、ボクは「王道」のつもりなんだけどさ・・・と日記には書いておこう。

トップ記事となった不登校も、すぐに忘れ去られて、文科省も「新しい対策」などの動きはありません。もしかしたら、最近の学力重視への回帰や、管理強化の動きで、文科省は「不登校が増加する」と予想していたのかも知れません。

丸山秀一 [kasetu.maruyama@nifty.com](mailto:kasetsu.maruyama@nifty.com)

出典

- ・ 文科省 学校基本調査速報など多くの文献と資料
<http://www.mext.go.jp>
- ・ 全国紙ほか各紙
- ・ :PHP 総合研究所ホームページ (<http://research.php.co.jp/>)
「研究員コラム」
- ・ 丸山秀一「不登校の現状と報道 2006」レポート